

第3話：午後3時のビオラウンド

午後三時、静かだった部屋に突如として響く「にゃーっ！」という高らかな声。
ビオラちゃんだ。食いしん坊の彼女にとって、この時間は“おやつの気配”が漂い始める重要な瞬間である。

小柄な体をいっぱいに使って、まるで弾丸のように走ってくる。

濃淡の茶マーブル模様の毛並みが、光を受けてキラリと揺れる。

「にゃーっ！」と私の顔を見て鳴き、くるっと振り返りながら走っていく--これが、ビオラちゃんのお得意パターン。

私が立ち上がるのを確認すると、跳ねるようにおやつ置き場の前に誘導し、ぴたりと停止。

その一連の流れるような動作を、私はひそかに「ビオラウンド」と呼んでいる。

まるで動作法のセッションで、クライアントが「したい」「伝えたい」という衝動を、からだ全体で表現する瞬間のよう。

欲求が明確で、それに向かう動作がまっすぐで、なおかつ楽しげ。

彼女の中には、原初的な「生の勢い」があふれている。

だが、そんなビオラちゃんにも“割に合わない瞬間”がある。

猫じゃらしで一番がんばって獲物をしとめても、おやつのは番は最後。

ぽーちゃんが一番、アビイちゃんが二番、ビオラちゃんは三番目。

くわえた猫じゃらしを口から外しても、文句ひとつ言わず、ちゃんと待っている。

このあたりにも、彼女の「柔らかい強さ」がにじんでいる。欲しいものはちゃんと表現するけれど、流れの中で自分の位置も自然に受け入れている。

それは動作法でいうところの、「欲求と現実との調整」の感覚にもつながる。

ときどき、ビオラちゃんのまなざしに、無垢で聡明な魂が宿っているように感じる。